

## 道のたとえ

天理教においては、「道」という言葉が特徴的に、そして頻繁に使われている。特に、神殿講話や信仰者同志での会話に出てくる際には、丁寧語の「お」をつけて「お道」と言われることが多い。これはほとんど、「天理教」と同じ意味で使われていると思われる。そのほかにも、道のつく言葉は、『天理時報』や教内の雑誌などを読んでみると、多数見つけることが出来る。筆者の目についたところからその一部を挙げれば、「たすけ一条の道」「道あけ」「道一条」「道の子」「道の教職員の集い』『道の動き』(年鑑)などがある。これらの中でも、後の3つでは、「道」を「天理教」と言い換えても、それほど大きく意味は変わらないような印象を受ける。しかし、前の3つでは、言い換えてしまうと少し意味が変わってしまうように思われる。

## 「お道」と「天理教」

まず、それぞれの意味を『改訂天理教事典』によって確認してみたい。「お道」の項目においては、次のように書かれている。

道という言葉は、「おふでさき」「おさしづ」にきわめて多く見出される表現である。それは、教えを聞き実践していく生き方を道を通ることにたとえた言い方である。そして、このみちハドふゆう事にをもうかな

このよをさめるしんぢつのみち（ふ6：4）

と示されているように、親神がつけられ、教祖（おやさま）が通られ、「よふぼく」（ようぼく）によって進められている「道」こそが、この世治める真実の道である。こうした信頼と尊敬の思いを込めて呼び、親しんできてるのが「お道」という言葉である。しばしば「お道では」とか「お道の者は」とかいわれるが、これは天理教ないしは天理教の信仰を指すものとしてこの言葉を用いているのである。

続いて、「お道」と一見同じような意味で用いられている「天理教」の項を見ると、その最初に次のように記されている。

中山みき（1798-1887）を教祖（おやさま）と仰ぎ、教祖の特別な人格にふれ、その声に導かれ、その教えを奉ずる者によって組織された信仰集団をさす。すなわち、教祖によって啓示された教え、教え示された祭儀、および、それを信じ行う者によって形成された信仰組織や制度の総体をいう。

これに続き、教祖のひながた、信仰対象である天理王命、3つの原典、おおよその教会数について説明がなされている。

「お道」の項の終わりに、「天理教ないし天理教の信仰をさすものとしてこの言葉を用いている」とあるが、このように事典の意味を並べてみると、二つの言葉の持つイメージに少なからぬ相違があることが分かる。「お道」の項には、信仰者であるかどうかの明確な線引きはなく、一つの、そして確かな「生き方」を表すものとして説明されている。また、「たとえ」（譬え）であることから分かるように、実践する者にとって感覚的に理解しやすく、親しまれている言葉であるともいえる。

それに対して、「天理教」の項では、「組織された信仰集団」あるいは「信仰組織や制度の総体」だとされる。それは輪郭を明確に説明し得るものであり、教祖、信仰対象、聖典、教会組織について、形式的な説明がなされており、この観点から言え

ば、信仰者かどうか、組織のメンバーかどうかの線引きが明確に意識されることになる。

宗教学者の福嶋信吉は、この違いに着目し、「ここでは『天理教』が『宗教学』的な『宗教教団』の一つとして定義されているのに対し、『お道』はそれが表象される実践的な場面を拾いあげ整理した説明となっている」と述べる。そして、天理教と同様に、「お道」という言葉で信仰が表現される金光教の事例をあわせて検討し、「お道」と表象されるものと「近代宗教」のカテゴリーで把握されるものとの差異、「お道」の「信心」が生成していく要件、ならびに、その「信心」の特質を明らかにしようと試みている（福嶋「〈お道〉として語られる〈宗教〉世界」、島蘭進・鶴岡賀雄編『〈宗教〉再考』ペリかん社、2004年、256頁）。

## 道にたとえて

原典の中で、年代的に「道」という言葉が最初に出てくるのは、次に挙げる「おふでさき」のおうたである。

よろづよのせかいぢふうをみわたせば  
みちのしだいもいろへにある（一号 45）

このさきハみちにたとへてはなしする  
どこの事ともさらにゆハんで（一号 46）

やまさかやいばらぐるふもがけみちも  
つるぎのなかもとふりぬけたら（一号 47）

まだみへるひのなかもありふちなかも  
それをこしたらほそいみちあり（一号 48）

ほそみちをだんへこせばをふみちや  
これがたしかなほんみちである（一号 49）

このはなしほかの事でわなほに  
神一ぢよでこれわが事（一号 50）

この一連のおうたの47～49は、昭和21年に曲がつけられて、おうた1番『やまさかや』として発表された。おうたシリーズの最初である。このことから、この「道」に関するおうたが教内で大事にされ、親しまれていることが窺える。『改訂天理教事典』の「みち」の項目には、この一連のおうたのほか、「おふでさき」「おさしづ」を引いて、「こうした『道』という言葉から、『道一条』（みちいちじょう）とか『道の子』という使われ方がなされている。『道一条』とは、親神の教えないしは教祖の『ひながた』によって生活することをいうが、さらに派生して、『道一条になる』『道一条で通る』という言葉でいわれる場合、ほかに職業をもたない布教専務の生活を指して使われるようになってきている」と述べられている。すなわち、原典の「道」という用語から派生して、教内に「道」という教語が生まれてきているということである。

「天理教」と「お道」の言葉が持つイメージの相違から、上記の福嶋は、宗教を捉えるための新たな概念として「お道」を検討している。ここでは、そうした宗教の概念というような話題に展開するのではなく、原典において「道」がどのように用いられているかについて、「おさしづ」の用例を検討したい。普段、何気なく使っている天理教の教語について改めて問い直すことを通して、この道の信仰の要を探求する試みとしたい。